2歳児の行動特徴に関する研究（2）

――「笑い」の観察を通して――

研究第8部　星　美智子
共同研究者　清水玲子（埼玉県立衛生短期大学）
植村規代（家庭生活研究会）
小林千鶴子（2歳児研究グループ）

Ⅰ　研究目的

感情は主体の直接体験であるだけに，とらえにくい領域ではあるが，子どもの身体発達および知的発達の研究に比較してきわめて限られた数少ない研究があるにすぎない。感情の研究分野でも，恐れ，怒り，不安に対して喜び，楽しみの分野は未開拓であり，「笑い」に関しては，乳児初期の微笑反応の研究にとどまっている。

われわれは，昨年度，遊び全般を通して2歳児の行動特徴をみてきたが，今年度は「笑い」に焦点をあてて2歳児の行動特徴をとらえるとともに，子どもの「笑い」の発達をさぐることを目的として研究をすすめた。

Ⅱ　方　法

〔対象〕

対象児は当研究所における育児講座の2歳児43名である。隔週，1時間半ずつの保育で9回連続を3期（各期約15名ずつ）に分けて行なった。（保育者3名）

〔手続き〕

a　観察者2名が，それぞれ毎回対象児1名ずつの行動，表情を詳しく記録する。

b　観察者，保育者全員で，毎回対象児全員について，ひとりひとりの行動，表情について討議し，記録を整理する。

c　保育室と，母親が講座を受ける部屋は，隣接し，上半分がガラスで見えるようになっており，戸は開けたままにしておいた。つまり，母親とは別室であるが，子どもたちが母親のそばへ行くことは自由にできる状況を設定して保育を行なった。

〔観察期間〕

1980年9月～1981年7月

Ⅲ　結　果

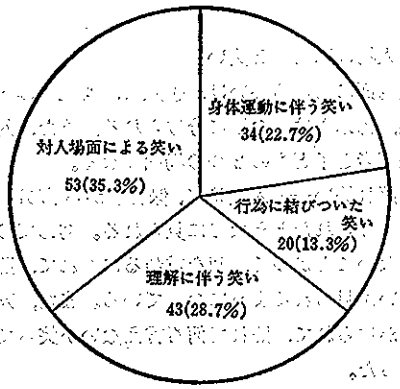
対象児ひとりひとりの行動，表情に関する記録を，次の視点で整理した。

1．笑いの誘因による分類

記録から笑いと結びついた行動をとり出し，なぜ笑ったか，その誘因を明らかにした。笑いを，内的誘因である①身体運動に伴う笑いと②行為に結びついた笑い，外的誘因である③理解にともなう笑いと④対人場面による笑いに分類した。なお，一つの行動について，笑いの誘因が二つ以上のものは，それぞれの誘因に分類した。

以上のように分類した場合の場面数を示したのが図1である。対人場面による笑いが53で最も多くなっており（照れ4，親しみ15，共感21，甘え・ふざけ13），以下③の理解にともなう笑いが43，②の行為に結びついた笑いが20（成功感13，期待7）という数になっている。

第1図　笑いの誘因別場面数



1.）身体運動に伴う笑い

身体運動に伴う笑いは，自分で身体を動かし，そのこと自体に快感を覚えて満足している状態である。たとえば，台の上に乗り，足を踏みならしてドンドンと音がするのを喜んだり，ビニールのカラートンネルを揺さぶらて笑ったり，興奮しておやつの皿を頭にのせては落としてキャーキャー騒ぐ，などである。

2）行為に結びついた笑い

自己の行為の予期と結果の2つに分け，①自分がこれからすることへの期待の喜び，また，②いま行なったことへの満足，充実感（成功感）などがそこに含まれる。

①　期待の喜び――グループ活動の回を重ねるにつれて，次の活動への見通しができ，入室時から遊びを楽しみにニコニコしている場合や，「おやつよ」，また「さあ，紙芝居を始めます」の声にうれしそうに笑う場合などがある。

②　成功感，満足――この項目は，自分の力で何かをやりとげた喜びである。たとえば，ビニールのトンネルを初めてくぐり抜けて出てきたとき，台の上からうまく飛び降りることができたとき，ボール投げで，首尾よく受け取れたとき，絵が描けたとき，などに見られる。

3）理解にともなう笑い

対象を認識したり，理解したりする喜びを，この項目としてとりあげた。たとえば，次のようなものが含まれる。絵本や紙芝居を見て，自分の知っているものや好きなもの（クマ，犬，タヌキなどの動物，救急車やトラックなどの自動車，ホットケーキなどの食べ物，チューリップ等）を見つけて喜ぶ。おもちゃの電話をかけたり，保育者とやりとりをして楽しむ。ままごとで，ごちそうやお茶を作って差し出したり，受け取って飲むまねをしたりして喜ぶ。他の子どもたちが，トンネルやおふろ遊びをしているのを見ておもしろがる。ことばで，おせんべのことを，わざと「オセンバ」と違えて言っては喜ぶ。

4）対人場面における笑い

対人場面における笑いは，①照れ，②親しみ・甘え，③共感，④ふざけ，などに分けられる。また，対象としては保育者と子どもの2つの場面になる。

①　照れ笑い――入室時に，保育者から「おはよう！」と声をかけられたときなどに見られる。初めての場面では笑わないことが多く，回を重ねるにつれて，照れながらも笑いが見られるようになっている。また，友だちから話しかけられて，照れて何も言えないが笑っている場面があった。

②　親しみ・甘えの笑い――この笑いは，目と目が合ったときにニッコリする，ままごとのやりとりの中で，お茶を受け取り，友だちにニッコリする。など，親しみの気持を表わす笑いである。

③　共感にかかわる笑い――これは，相手に共感を求めるように笑う場合（成功したのを認めてほしい，トンネルの中で出会った友だちに「コンニチワ」と笑いかける，など），一緒に遊んでいて共感の喜びで笑う場合（何人かでかけまわる，2人の子どもがおもちゃの電話のベルを鳴らしあっては笑う）などがある。

④　ふざけ笑い――ふざけ笑いは，保育者の隣りにすわり，顔を見あわせて笑ったり，保育者の誘いに，わざと「イヤ」と言って笑ったり，保育者の後をニヤニヤしながらついてくる，といった場面に見られる。また，わざと足を椅子の上にのせて保育者の顔を見てはニヤッとしたり，ままごとで，保育者が差し出したお茶をわざとこぼしていたずらっぽく笑ったり，という場面も見られ，保育者の注意を引こうとしているのがわかる。また，友だちとふざけあって笑う場合もある。

第2図　対人場面における笑い

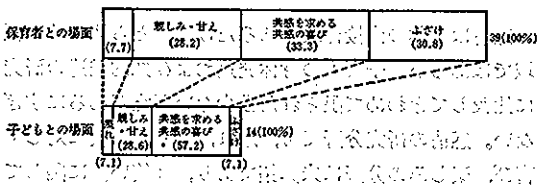


図2は，対人場面における笑いを，対保育者と対子どもの場面に分けてみたものである。全体の割合で見ると保育者との場面73.6％に対し，子どもとの場面26.4％と，保育者の方が多くなっている。保育者との場面では，共感を求める笑い（33.3％），ふざけ笑い（30.8％），親しみ・甘えの笑い（28.2％）が大差なく，全体をほぼ三分している。これに比較して子どもとの場面では，共感を求める笑いが大部分（57.2％）を占め，親しみ・甘えの笑いはその半分（28.6％）となっている。また，ふざけ笑いは対保育者の30.8％に対し，きわめて少なく7.1％である。

2.　グループ活動の場面による分類

さらに，活動場面によって，笑いの頻度や質に，どのような違いがあるかを整理した。

1）入室時

はじめは，保育者が近づいてあいさつをすると緊張し，表情が固くなる場合が多く，回を重ねるにしたがって，照れ笑い，親しみの表現としての笑いが出てくる。

2）母子分離

泣いて後を追う子や，あっさり別れ，遊びに熱中する子など，いろいろであるが，この場面では，笑いはまったく見られない。

3）紙芝居

椅子にすわってよくみている子が多かったが，比較的笑いが少ない。真剣な表情で集中していることが多い。また，登場するものが自分の知っているものの場合，わかったうれしさで笑うことがあった。

4）手遊び

保育者をいっしょうけんめい見ながら手遊びの動作をしている子どもたちは，真剣な表情をしており，笑っていない。また，自分ではまったく手を動かさないが，やっているつもりでうれしそうな表情で見ている子もいる。

5）おやつ

おやつの場面では，ホッとしたなごやかさがあり，ちょっとしたきっかけで笑いが出ている。（おせんべをパリパリッと音をさせてニャッとしたり，保育者の「おいしい？」とのことばかけに笑顔でうなづいたりする）

6）自由遊び

でんしゃごっこ，トンネルをくぐること，台の上でドンドン足を踏みならしたり，台の上から飛びおりる遊び，ビニールボールをころがしたり空気を入れたりすること，ままごと，電話，絵をかくこと，絵本，おふろごっこなどが，子どもたちに好まれる遊びであったが，動作が単純なもの（台の上でドンドン足を踏みならす，おふろのつもりでスポンジで身体をゴシゴシこする，など），友だちとのやりとりでは，遊びながら笑いが出ているが，その他の場面では，いっしょうけんめい遊びに取り組んでおり，笑っていない。

7）片づけ

片づけの場面になると，全体に安心した雰囲気になり，子どもたちは，生き生きと片付けに参加している。それまで母親のそばから離れず，保育室で充分遊んでいない子どもも，母親をそばに立たせながらではあるが，ままごと，汽車，ボール，ままごとのござ，ぬいぐるみなどを生き生きしたようすで片づける光景がよく見られた。

8）終了時

（7）でようやく生き生きしてきた子どもが保育者の笑顔や「さようなら，またね」のあいさつに，笑顔でこたえていることが見られる。

Ⅳ 考　　察

以上の結果から，笑いにかかわる2歳児の行動特徴について，次のような考察をおこなった。

1. 笑いの誘因について

1）身体運動に伴う笑い

自分の身体を動かすことによる満足，快感は，乳児期から見られるものである。ここで見られるように足をドンドン踏みならしたり，ぐるぐる走りまわったり，という身体運動は，単純な動作のくり返しが多く，目的やルールを持った行動ではない。また，保育者が抱いてぐるぐる身体をまわすなど，保育者による身体動作も1/3を占めるが，単純なもののくり返しである。こうした，単純な動作そのものへの満足は，素朴なものであり，2歳児の幼なさを表わしているといえる。

2）行為に結びついた笑い

次にくるものを期待して笑うということは，行動の見通しが出来なければ起こらない現象であり，それだけ高度な精神活動である。見通しのできない子は「おやつだからすわりましょう」の呼びかけにも応じないでおもちゃをいじっており，実際にお皿にのせたおやつを見せるとあわてて席に着く，という行動になる。2歳児は，ごく近い未来への見通しが育ちはじめる時期といえるのではないだろうか。イメージの明確なものに対して期待を持ち，少しなら待てるようになる時期であるとも言える。

行為後の成功や充足の笑いは，1歳児から見られるが，精神発達とともに内的な満足に移行し，成人では「笑い」として観察されなくなるであろう。ここで行為の前後に生じる笑いをみたが，行為そのものは笑いを伴っていないのも特徴的である。何かをやりとげるとき，2歳児も真剣に取り組んでおり，一方，容易にできることは，もう充足感の笑いを伴わないのである。

3）理解にともなう笑い

笑いをもたらす対象は，具体的，直接的なもの（紙芝居や絵本における動物，車，などの絵）や単純な活動（おもちゃの電話で「ガチャン」とか「プチン」などと言っては受話器を置くくり返し）であることが多い。これは3歳児の興味と理解について検討したなかでも，紙芝居の場面やことばのくり返しに興味を示しているところから，2歳児では，発達的に当然といえよう。また，ことばを使ってふざける（おせんべいのことを，わざと「オセンパ」と言い違えて笑うくり返し）という高度な精神活動の芽生えも2～3人の子に見られた。ことば自体で遊び，笑うということは，ことばによるユーモアの理解につながっていくと思われる。

4）対人場面における笑い

保育者に対して笑う場面が圧倒的に多く，友だちに対しての笑いは少ない。これは，昨年度の2歳児の行動特徴の研究でも述べているように，友だちとかかわっても，うまく関係をつくれない2歳児の特徴のあらわれといえる。友だちに対する笑いでは共感の笑いが比較的多いが，おもに，集団で動くときであり，1対1の場合より緊張なしに友だちと気持の交流ができることを示しているように思われる。

また，保育者との共感では，子どもが何かやりとげた

場合，保育者に認めてほしい，というものが多く，2）の成功感や満足も，保育者に認めてもらうことで強くなっていることがうかがわれる。

2．保育場面と笑いの内容との関連

1）不安の解消

入室時の不安は回を重ねるごとに薄れるが，入室時から，まったく緊張がなくなることは難しく，2歳児にとって，2週間の間隔は，親しみを持続させるには長すぎるといえる。母親が隣室に移動する分離場面（母親について行くことを妨げない）で緊張が高まるが，これは一般の保育所でも生じることであり，当然であろう。

また，おやつを食べた後は全体的に解放的な雰囲気になり，笑いの頻度もより高く，また笑い方も大きくなることが見られた。おやつは，不安や緊張を解消するのに大いに役に立つことがわかる。おやつの時刻を30分ほど早め，その後，より長時間充実して遊べるようになったのである。また，片づけの場面では，全体的に安心感がみられ，子どもたちは生き生きと片づけを楽しむが，これは，もう終了の見通しが出来，不安や緊張が和らぐことによるものであろう。このことは，母親から離れられず，遊べなかった子どもも，この場面では急に生き生きして片づけに参加し，それまで眺めるだけであった遊具に触れていることに顕著に表われている。

2）興味の集中と笑い

紙芝居，手遊び，電車ごっこ，トンネルをくぐるとき，台から飛び降りるとき，など子どもは興味を持っていっしょうけんめい集中しているが笑いは伴っていない。楽しい体験が，その行為の最中に必ずしも笑いを伴うものでないことが理解できよう。

3．保育者との関係と笑い

保育者との直接的な気持の交流以外にも，多くの場面での笑いが，保育者によってより強化され，持続することが見られた。成功感が，保育者に認められることによって強められることは前に述べたが，身体運動に伴う笑いなども，保育者が参加したり声をかけたりすることによって，より強化され，運動も活発になっている。これは，前回の研究で，2歳児だけでは遊びが長つづきしない特徴と，それだけ，そこに保育者が働きかける重要性があることを考察したが，そのことが，情緒的な側面から再度認識された。

4．グループ活動と笑い

集団経験がはじめての対象児は，最初は不安や緊張を示すが，いっしょに身体を動かしたり，おやつを食べたりするなかで，友だちといっしょにいることでより楽しい，という場面も生じてくることが見られた。子ども同志で，上手にかかわりをもつことは2歳児には難しいが，友だちと同じことをやって共感する楽しさは，機会を与えられれば経験できるといえよう。

5．個人差について

理解力の違いや，緊張の度合によって，各々の対象児の笑いは異なるが，その他に，ケラケラとよく笑う子，楽しくても表現の控えめな子，など，表現の仕方に個人差が見られた。

V　結　び

今回の研究は，未開拓の研究領域である「笑い」に，手さぐりのような形でとりくんだのであり，したがって，問題提起の段階にとどまるものである。

まず，笑いをひきおこすことの体系化の試みとして，(1)内的誘因と(2)外的誘因に二分し，内的誘因をa身体を動かす喜び，b自分の行為にかかわる期待や結果の喜びに分けた。外的誘因としては，a対人関係にかかわるもの，b対象の理解にかかわるものに分類した。各項について2歳児の行動特徴を，0～1歳，そして3歳以後成人までの発展を想定しながら考察してみた。

その結果，Ⅳ考察に示すように，「笑い」の分析から2歳児の行動特徴のいくつかが明らかにされた。つまり単純な身体活動に喜び，繰返しのなかでの期待や成功に笑い，身近な対象の認知に満足の笑みをうかべ，保育者や友だちとの共感の嬉しさを笑いで表現する。そして，保育者が参加し働きかけること，成功を認め，共感の求めに応ずることなど，保育者によって強化される笑いが多いことが明らかであった。また，保育場面では，おやつや帰りの片づけの時間に解放的な高笑いが多く，これは逆に，2歳児のグループ内でのそれなりの緊張をうかがわせるものである。

子どもが喜びをもって生き生きと活動することは心身発達の原動力であり，保育のなかでも，個々の子どもの発達や個性を考慮し，こうした活動をひきだす指導が大切であろう。

参考文献

1）星美智子他：3歳児の興味と理解―紙芝居を通して―，日本総合愛育研究所紀要第14集（昭和53年）
2）星美智子他：2歳児の行動特徴，日本総合愛育研究所紀要第16集（昭和55年）
3）波多野完治：子どもの認識と感情，岩波新書（昭和50年）